

糟目犬頭神社



糟目犬頭神社 由緒略記

鎮座地 岡崎市宮地町字馬場三十一番地

一、御祭神

彦火火出見尊ひこほほでみのみこと

犬頭靈神

豊受姫命とようけひめのみこと（食物・穀物を司る女神）

伊弉諾尊いざなぎのみこと

伊弉册尊いざなみのみこと

素戔鳴尊すさなみのみこと（三社熊野神）

一、御由緒

犬頭神社の創立年代は古く明かではありませんが、社伝によれば雄略天皇の六年（四六一）諸國に桑を植え養蚕を奨励されたころ、養蚕の守護神を勧請したと伝えられています。兵範記（平信範の日記）には『犬頭系を三河の国より毎年四百勾皇后官職へ納め内六〇勾は三條女御の御領として碧海荘より貢』と記載され、また、今昔物語の犬頭物語にも天下一の糸と賞賛され天皇の服を調整したと伝承されています。三河国内神名帳（八六三）には「從四位上 犬頭明神」と記載され碧海郡内二二社の一社にあげられています。永延元年（九八七）に紀州熊野三所大権現を合祀して熊野権現と称しました。

糟目犬頭神社は大宝元年（七〇二）に彦火火出見尊を祀ると社伝にありますが、正確な年代は推定できません。仁寿元年（八五一）の文徳実録には「三河国糟目神に從五位下を授く」とあり、三河国神明帳には「正四位下 糟目明神」、延喜式神明帳（九二七）には「三河国二六座 碧海六座 糟目神社」と記載され、その当時の公認の主要な神社でありました。旧社は上和田の糟目森崎に鎮座していたが、矢作川の洪水により建久元年（一一九〇）に犬頭神社に遷座合併しました。

当社は、古くより諸人の崇敬が厚く諸國俚人談には「銅錢百文を口に喰えて参拝すれば福徳を得る」と伝えられ、岡崎城主本多豊後守が奉納された鳥居・狛犬などが現存しています。観応元年（一三五〇）には足利尊氏より永百貫文の社領を寄進され、慶長八年（一六〇四）には家康公より朱印地四十三石を授かり、明治元年奉還するまで続きました。明治四年額田県令により糟目犬頭神社と改称、明治五年郷社に列せられました。

犬頭物語

（三四六）

貞和二年のこと、上和田城主宇都宮泰藤が当社で鷹狩をしました。この時、社殿の南西にあった七かかえもある杉の大木の下で休んでいるう

ちに、うとうとと寝てしまいました、すると、杉の大木から大蛇が泰藤を飲み込もうとしました。これを見た白犬がしきりに吠え身の危険を知らせました。ところが、泰藤はそれに気付かず目を覚ましましたが、また、寝てしまいました、白犬がなおも激しくほえ立てるので泰藤は怒って刀を抜き、白犬の首を切ってしまいました。すると犬の首は飛びあがり大蛇の首に噛み付き殺してしまいました。泰藤は驚き、白犬の首を塚に埋め吊いました。

首塚

当社の境内にある池の小島は、宇都宮泰藤が犬の首を埋めた塚だと言われているが真実は泰藤が京都の獄門から奪った主君新田義貞の首を埋め、世間の人に知られないように、犬の伝説を作り、犬の首だとふれ流したものであろう。義貞の首を犬の首だと称し、柵を作った者に柵木を塚を築いた者に犬塚の性をあたえ塚を守らせ、義貞の菩提をとむらい仏門に入り妙国寺で一生を終ったことなどから考え合わせても義貞の首の様である。足利尊氏が社領を寄進したのは、義貞の首塚を知ったことと思われる。

今昔物語

参河國始犬頭、得蚕糸話

三河國のある郡司は二人の妻に蚕を飼わせていた。ある年、どうしたことか本妻の蚕がみな死んで、糸がとれなくなってしまった。郡司も何となく気味悪くおもしろい、寄りつかなくなつたので、本家の家は自然に貧しくなり、妻はたった一人でわずか二人ばかりの使用人とさびしい年月を送っていた。家で飼っていた蚕もみんな死んでしまったので、蚕飼いもやめてしまったが、たまたま一匹の蚕が桑の葉に止まって葉を食べているのを、彼女は見つけ、これをとって飼っているうちに、この蚕はどんどん大きくなつた。これを見ているとかわいくなり、大事に大事に育てた。これ一匹飼つてもどうしようもあるまいと思つてみたが、長年飼ひ慣れたことを、この三、四年はまったくしてなかつたので、思いもよらず飼うようになったことが嬉しくて、これがかわいがつて、やしなつていると、あるとき、その家の白犬が突然走つてきて、この大事にしていた蚕を食べてしまった。あつと驚くとともに悔しくて仕方がなかつたが、蚕を一匹食つたからといって、犬を打ち殺す訳にもいかない。おどろき悲しんで、ぼんやりと犬を

みていると、犬がくしゃみをはじめ、二つの鼻の穴から白い糸が二筋、ちよつとばかり出てきた。これを見て不思議に思い、その糸をつかんで引くと、二筋ともするする出て来たので、それを糸枠に巻きつけた。いっぱい巻き取り、さらに次の糸枠を取り出して巻くと、また出て来るので次の糸枠を取り出して巻くと、また出て来るので次の糸枠で巻き取った。こうして二、三百の糸枠に巻き取ったが終らず、次には竹の棹を渡してそれにくり掛けた。それでもまだ尽きず、今度は桶に巻いた。四、五千両（一両は三七・五グラム）ほど巻き取って後に糸の末端が繰り出されると、犬は倒れて死んでしまった。その時に、妻は、これこそ仏神が犬になってお助け下さったのだと思い、家の後ろにある畑の桑の木の根元に犬を埋めた。

さて、この糸を精製出来ずに持て余していると、夫の郡司が用足しに行くだついでに、その門前を通りかかった。家の中がたいそう寂しげで、人気がないので、さすがに哀れをもよおし、ここの妻は今どうしているだろうかと、かわいそうになり、馬から降り、家に入ってみたが人影もない。ただ、妻が一人きりで、沢山の糸を前にしてぼうぜんとしている。見ると、我家でたくさん飼っている蚕から取る糸は黒く、節があつて粗悪なのに、今、目の前にある糸は雪のように白く、光沢のある美しい糸がいっぱいあるではないか。

郡司はこれを見て大いに驚き、『いったいどうしたことだ』と尋ねると、妻はつまずき一部始終を語った。

これを聞いて郡司は、『神仏がお助けなさったこの女をわしはおろそかにしていた』と後悔し、そのまま本妻のもとに止まり、新しい妻のもとへは行かず、この妻と一緒に暮らすようになった。

その犬を埋めた桑の木には、まもなく蚕が隙間なく繭を作った。それぞれを取って糸にすると、言いうようもなく素晴らしい糸となった。

郡司はこの糸の出来た次第を国司、某に語って聞かせたところ、国司はこれを朝廷に言上したが、それ以後、犬頭と言う糸をこの国から、献上することになった。この郡司の子孫がそれを受け継ぎ、今もその糸を献上する家として続いているそうだ。

この糸は蔵人所に納められ、天皇のお召し物に織られることになっていく。天皇のお召し物の材料としてこの糸は世に現れたのだ、と人々は語り伝えている。また、新しい妻が本妻の蚕を計画的に殺したのだと語る人もあるが、たしかなことにはわからない。

思うに前世の因縁によって夫婦の仲ももとに戻り、糸も出て来たのであらう、と語り伝えていると言う事だ」

以上

岡崎市指定文化財

糟目犬頭神社

建造物 犬頭神社石鳥居 一基

越前式の形式を示すものとして価値があり、慶長十年（一六〇五）岡崎城主本多豊後守康令（康重）の奉納である。原石は越前（福井県）産の笏谷石と呼ばれる凝灰岩である。

彫刻 犬頭神社石造狛犬 一基

狛犬は仏教守護の獅子として渡来し、形、名前も変わってきた。この狛犬も越前石製で、慶長十五年本多豊後守康令の寄進。

彫刻 犬頭神社石造唐猫 一基

小型の狛犬で、奉納者は「唐猫」としている。愛らしい猫の形で、猫には毛髪というべきものはないが、これは頭から放射状にたてがみがあり、獅子彫刻の伝統を残している。越前石製で慶長十年市川猪兵衛正重寄進

昭和四十二年九月十四日指定

黒松の並木参道を通り過ぎた先には第二の鳥居。これが指定文化財ね。



市内最古といわれる越前式鳥居は、ぱっと見ただけでも他の鳥居にはないオーラが漂っている。

越前鯖江産の凝灰岩というだけあって、これまでの鳥居と見た目やさわり心地が違う。柱には文字がびっしりと彫られているんだなこれが。



市指定文化財（昭和42年9月14日指定）

けんとうじんじやせきそうからねこ

犬頭神社石造唐猫 1対

糟目犬頭神社（宮地町）



吽形

阿形

福井越前産笏谷石製で、総高約21.5cmの小形の唐猫です。一対で雌雄の区別がなく、頭髪はオールバック式で、どちらも同じように放射状に縦線のみが描かれています。阿、吽を表現しており、吽形の方には立派な牙があり、阿形にはありません。

銘文によると、この唐猫の作者は市川猪兵衛正重であり、慶長10年（1605）に神社の鳥居を建立し、お礼のために唐猫を造り奉納したと考えられます。狛犬ではなく、唐猫が表現されているのは珍しい例です。

市指定文化財（昭和42年9月14日指定）

けんとうじんじやせきそうこまいぬ

犬頭神社石造狛犬 1対

糟目犬頭神社（宮地町）

福井越前産笏谷石製の狛犬です。一対で雌雄の区別があり、雄は高さ約75.5cmで、頭上に円錐形に渦巻を作り、口を閉じた吽形を表現しており、また性器も彫られています。雌は高さ約77cmで、口を開けた阿形を表現しています。

この狛犬はさきの唐猫より5年後の慶長15年（1610）に制作され、作風よりみると、作者は別人と考えられます。



吽形



阿形

糟目犬頭神社年表

古墳・大和時代

雄略天皇 (四六二)

犬頭社創建不詳・桑園奨励

飛鳥時代

大宝元年 (七〇一)

糟目神社創建・彦火火出見尊鎮齋

仁寿元年 (八五一)

糟目神 住五位下 文徳実録

平安時代

延喜元年 (九〇五)

糟目神社 延喜式

糟目明神 正四位下 三河國神明帳

犬頭明神 從四位上 三河國神明帳

比蘇天神 從五位下(宮地町) //

延喜五年 (九二七)

糟目神社 正四位下 延喜式神明帳

犬頭神社 正四位上 三河國神明帳

紀州熊野三所大権現勧請

永延元年 (九八七)

白犬物語 犬頭系献上 今昔物語

永承元年 (一〇四六)

今昔物語 犬頭物語(三河國・・・)

平安後期 (一一五〇)

兵範記に犬頭絲を毎年四百勾皇后職へ 内六十勾は

三條女御の御領として碧海荘由り貢

碧海荘より犬頭絲調貢

仁安三年 (一一六八)

糟目神社 犬頭神社合併

鎌倉時代

室町時代

暦応元年 (一三三八)

新田義貞戦死 首級を和田に隠す 首塚

貞和二年 (一三四六)

上和田城主宇都宮泰藤鷹狩 犬頭靈神奉齋 犬頭物語

親応元年 (一三五〇)

足利尊氏熊野権現領五百貫目寄進

// 三年 (一三五二)

宇都宮泰藤死去 宮地・妙国寺

安土桃山時代

天生十五年 (一五八七)

大杉伐採 船を造る(秀吉の命により岡崎城主)

江戸時代

慶長八年 (一六〇三)

犬頭神領 四十三石朱印 拝殿再建 犬頭大明神

慶長十年 (一六〇五)

本多豊後守唐猫寄進 市川権兵衛作 岡崎市指定文化財

慶長十四年 (一六〇九)

// 鳥居寄進 岡崎市指定文化財

慶長十五年 (一六一〇)

// 高麗犬寄進 岡崎市指定文化財

江戸時代朱印高四十三石と岡崎藩より社領二十石を七人

の社人が分割所有し、宮行事等の運営は『七人わりの事』

によつて実施されていた(市川市太夫・市川彦衛門・内田

二郎左衛門・本多藤助・大久保平太夫・大久保千代・伊藤

忠左衛門)

明治時代

明治元年 (一八六八)

徳川氏朱印奉還

明治四年 (一八七一)

犬頭大明神を糟目犬頭神社に改称

明治時代 明治五年（一八七二） 郷社

明治三四年（一八八九） 本殿再建

明治三八年（一九〇五） 拝殿再建

明治四十年（一九〇七） 日露戦役碑建立 英霊三柱

神饌幣帛料供進指定

大正時代 大正十一年（一九二二） 大燈籠建立十八尺五寸（犬頭館）

大正十四年（一九二五） 社務所再建

昭和時代 昭和二十七年（一九五二） 宗教法人『糟目犬頭神社』神社本庁愛知県神社庁九級社

昭和二十八年（一九五三） 忠魂碑建立 英霊四六柱

昭和四十二年（一九六七） 神門前鳥居・本殿狛犬・唐猫 岡崎市指定文化財

昭和六一年（一九八六） 神殿屋根修復工事

熊野三所権現奉齊壹千年祭（花火大会等で盛大に祝う）

平成時代 昭和六二年（一九八七） 狛犬一対建立

氏子崇敬者 宮地町・上和田町・法性寺町・牧御堂町・赤浜町・井内町

平成七年（一九九五） 氏子崇敬者 赤浜町・井内町脱退

平成十三年（二〇〇一） 神門再建

平成二十一年（二〇〇九） アルミポール幟立て建設

平成二十二年（二〇一〇） 堤通り手永御田扇祭（宮地町から赤浜町7月十一日送る）

平成二十五年（二〇一三） 神殿北側石垣再生工事

平成二十六年（二〇一四） 氏子崇敬者 牧御堂町脱退

平成二十七年（二〇一五） 氏子崇敬者 法性寺町脱退

堤通り手永御田扇祭

（平成二十七年六月岡崎市・西尾市両市民族文化財指定）

平成二十八年（二〇一六） 社務所再建工事開始（八月十五日上棟式）

平成二十九年（二〇一七） 社務所再建完了（三月）

平成三〇年（二〇一八） 大和田島辯財天（首塚）鳥居 再建（7月）

神社西側ブロック砂防壁設置（8月）

大和田島辯財天（首塚）祠 再建（10月）